

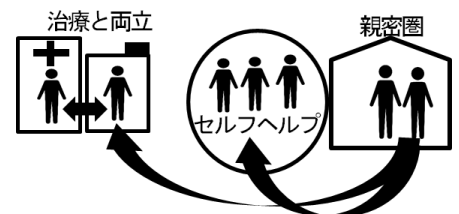
立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅢ(助教研究支援) 2021年度研究成果報告書

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部	跡部 千慧
研究課題名	性感染症 HIV 陽性ゲイ男性の「労働と生活」に関するジェンダー研究	
研究期間	2021年度	
研究経費	200千円	

【研究の概要】

本研究の目的は、性感染 HIV 陽性者であるゲイ男性の「労働と生活」を捉えることによって、「労働と生活」を射程に入れたジェンダー研究を発展させることにある。2000年代以降、日本を対象とした女性労働研究では、労働領域と家族領域の双方を行き来せざるを得なかった既婚女性労働者の経験を基軸に、戦後労働史研究が切り拓かれてきた(木本編 2018)。申請者は、この研究に学びながら、「労働と生活」研究を模索してきた(跡部 2021)。だが、これらの研究は、(義)両親と子どもがいる異性愛者を前提に、子育てや介護を媒介として労働・生活を分析してきたものである。「労働と生活」研究の視点に立つと、異性愛女性を中心に切り拓かれてきた研究を起点に、他の属性をもつ人々による生活の現実的基盤を捉える実証的な研究をもとに「労働と生活」の概念を広げていく必要がある。

本研究では、治療と仕事の両立の必要性が認識されつつある社会動向を踏まえ、性感染 HIV 陽性ゲイ男性に着目する。かつて「不治の病」と認識されてきた HIV/AIDS は、日本では 1997 年に導入された ART 療法により、慢性疾患へと変化を遂げた。一方、完治薬は未だ存在せず、服薬を中断すればウィルスは再び増殖をはじめ免疫機能を破壊し死に至らしめる。HIV 陽性者は、治癒はせず半永久的に治療を受ける。こうした性感染 HIV 陽性ゲイ男性に着目することによって、異性愛とは異なる親密圏の在り方や、治療と仕事の両立から「労働と生活」を捉えることを試みた。



【研究の成果】(今後発表予定のものを含む)

1995年に創刊されたゲイ雑誌『G-men』の分析によって、HIV 陽性ゲイ男性の「労働と生活」の実態を掘り下げた。雑誌『G-men』は、従来タブーとされた HIV に関する記事を入れ込んだだけでなく、従来の HIV 予防啓発と一線を画し、「いかに性を楽しみながら HIV にかかるリスクを減らしていくか」という実践的な観点を入れ込んだ点に斬新さがあり、HIV 陽性ゲイ男性の生活実態も描写していた。

雑誌『G-men』に描かれた HIV 陽性ゲイ男性の場合は、生殖、ケア、寝食、家計が別々の構成員によって形成されており、異性愛家族を前提に親密圏を捉えた場合——生殖・ケア・寝食・家計が同一の構成員による強固な絆を前提に形成される——とは異なることが明らかである。さらに、「在宅ひとり死」は、異性愛家族や子どもといった家族のつながりを前提としていない点で共通点があるが、HIV 陽性ゲイ男性とは、ケアの提供・受容の面で異なる。これらの研究成果を、2022年6月の国際学会で発表し、論文を投稿する予定である。